横澤彪（たけし）の

電視（テレビ）超人列伝

トンボの目の男　田中康夫（54）

「なんクリ」から30年…いまや政治家の顔 なにより物事を俯瞰する観察力に期待

1980年代初頭。小説「なんとなくクリスタル」を発表、衝撃的なデビューを果たした。まさに新人類の登場という感じで、ホリエモンが近鉄バファローズを買うかと言って、若者の人気をかっさらったが、田中康夫の人気はその10倍はあったろう。

なにしろ、一橋大学法学部の学生である。最初は、日本興業銀行に就職が内定していたが、取り消されて留年。フジテレビの入社試験を受けにきた。ぼくはトップの鹿内春雄フジサンケイグループ議長から、グループの説明をしてやってくれといわれて、小柄だが輝くようなオーラと、美人に目がキョロキョロ動く落ち着きのない青年と会った。これが田中康夫との出会い。もちろん、こういう男が会社に入ることは、当時のフジテレビにとっては、大歓迎だから、すぐに㊙で内定した。

年が明けてしばらくして、とつぜん、訪ねてきて「ぼく、入社取り消してもらいたいんですけど」という。びっくりして、「どうして？」と聞くと、「だって、近くにいい女子大がないし、東京女子医大じゃしようがネエよ」と口をとがらせた。

フジテレビ入社をあきらめ、卒業と同時にモービル石油に入社、作家との両立をはかるが、ムリと判断、3カ月で退社、フリーでの文筆活動をはじめる。

そんなご縁で「笑っていいとも！」の初期、大学の先輩である山本コータロー＝写真上＝とのコンビで、毎週金曜日「五つのフォークス」というコーナーにレギュラー出演してもらうことになった。

早朝、電話。田中康夫が交通事故を起こしたという。すぐに病院へ駆けつけると、全身包帯でグルグルマキになりながらも「BM（W）だから助かった」とへらず口をたたいている。軽井沢からの帰り、関越自動車道の出口で、あの背の高い照明灯をねじまげるほどの大事故を起こした。こちらは、練馬警察の署長に平身低頭…。

扶桑社刊の雑誌「SPA！」で長いこと連載していた「東京ペログリ日記」。田中康夫の行動日記だが、これに最多出場のW嬢と、このたび結婚したという。康夫も54歳。身を固めるには遅すぎるぐらいの年齢になっている。めでたいかぎり。しかし、ぼくの計算では、どう考えても、3回目の結婚である。

お相手は、元日航スッチーの青木恵さん。北海道出身の才媛で、日航のカレンダーに載ったほどの美女だという。これで、政治活動も落ち着いてできるだろう。

阪神・淡路大震災のときのボランティア活動、長野県知事、そして、参院議員、新党日本代表と、いまや政治家の顔になっているが、田中康夫には、群れで行動するという意識が乏しい。やはり個性が強いので一匹オオカミの方が似合う。

田中康夫の趣味は地図を見ることである。最初は、女子大生と話をつなぐために「お宅の近くに大きな寺があるでしょう」といって相手をびっくりさせるという不純な動機だったかもしれないが、いまや物事を俯瞰するというトンボの目のような観察力をもつ男に成長した。このところテレビで人気になった池上彰＝同右＝も趣味が地図。彼の分かりやすさとは、田中康夫と同じように、物事を上から俯瞰するところから生まれているようにも思われる。

じっさい、こういう発想法を取れる日本人は、きわめて少ないのではないか。みな、左右前後や上や下を見て、それで安心しきってしまう。これも日本人の欠陥といえば、欠陥なのだ。康夫ちゃんは、きっと、長野県を上から眺めて「ダムじゃない」と判断したにちがいない。おそらく、長野県民は、田中康夫を追放したことを10年後に、大変な失敗だったと気がつくはずだ。

民主党がどうの、自民党がどうのと、ヒラメのような目で生きてもつまらない。いま、上の方からドーンと日本を見れば、最大のテーマは900兆円を超えた借金をどう返済するかが急務だと分かる。田中康夫のもつプライドと謙虚さ、育ちの良さ、品のよさ、そしてなによりもかによりも、その俯瞰力に期待したい。

（元テレビプロデューサー）